

平成8年7月 9日発行

鵠沼

久 久 比 奴 末

はまゆう と 櫻貝 と

海光る わが 故里

第 7 3 号

内容	近代住空間の形成	牧田 知子
	鵠沼南部の道	佐藤 和子
	鵠沼の古道「江ノ島道」を歩く	川上 恵久
	辻堂地区の古道を歩く	稲葉 元成

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保12年・1841）で、“くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。〔藤沢市史資料・第29集より〕

近代住空間の形成

— 鵠沼を例とする別荘型住空間 —

この文章は1995年 8月に、日本建築学会の正会員である牧田知子氏が学会での学術講演に発表した論文の概要である。

(なお、この資料は高木和男氏の提供によるものです)

1. 研究の目的

鵠沼の住宅地は、大給子爵とその協力者、伊東将行の活動を中心に明治・大正期の発展経緯をおって見た。今回は大正・昭和期の鵠沼が別荘地としての豊かさを保持しつついかにその住空間を変化させていったかを考察する。また本稿では現在の鵠沼松が岡、藤が谷、鵠沼海岸を中心により広域的に鵠沼を考える。

2. 大給子爵を中心とする初期鵠沼開発の概略

大給(おぎゅう)家は江戸時代は豊後大分府内二万一千石を有した譜代大名で維新後は宮内省に勤務した。また、鵠沼海岸周辺は、幕府の射撃訓練場であったことなどが関与して維新後、大給家は鵠沼の土地を所有した。その後明治20年代大給家では御用邸誘致の構想のもと新たに鵠沼の土地を購入したが、明治30年代その広大な土地は開放・分譲されていた。その際大給子爵の指示で作成されたのが大地図『相模国高座郡鵠沼村字上藤ヶ谷 下藤ヶ谷 下岡 中之所有地面』である。また、賀来神社の鵠沼への鎮座(明治38年)ほか、大給子爵に協力した伊東将行による名旅館「東家」(明治25年竣工)の繁栄などが鵠沼の初期発展に貢献した。

3 - 1 関東大震災前と震災後

以下に大正・昭和初期を関東大震災前と震災後に分け、鵠沼という住空間を特化あるいは変化させたと考えられる要素について述べる。

(1) 関東大震災前

① 名士の別荘誘致

大給子爵による初期鵠沼開発は、大正期に至り鵠沼に多くの華族・名士による土地所有・別荘建設をもたらした。その効果としては、数千坪単位で売られた敷地分割の大きさや、松苗を植えるなどの宅地整備に伴う住環境の改良が考えられ、その結果「當時は三百歩僅かに一圓位であったのが二十余年の今日三百歩一千圓余りの相場を示して居る。別荘も現在九十餘に達してゐる」（大橋良平「現在の鎌倉」通友社 明治45年）というように、地価も上昇した。

名士たちの大正期における別荘・土地所有については、華族では藤堂高紹（伯爵）、大給近孝（子爵）、長谷信義（子爵）、四條隆平（男爵）、蜂須賀定詔（伯爵）、久松定兒謨（伯爵）、そのほか小田柿捨次郎（三井物産参事長）、益田信世・村田峰次郎（三井社員）、郷誠之助（東株理事長）、馬越恭平（三井物産横浜支店長、大日本麦酒社長）、田中平八（田中銀行、東洋鉱山取締役）などがあげられる。

② 名旅館における文人・思想家たちの逗留

鵠沼には雑誌「白樺」が大正3～5年にかけて小泉鉄により鵠沼で編集されていたのをはじめ、大震災前には多くの文人・思想家たちが貸別荘や名旅館に滞在した。当時の鵠沼の様子は多くその著書・手記に描き出されている。今井達夫「鵠沼にいた文人」（「報知新聞」昭和10年 2月14～18日）によると、大正4年当時の武者小路実篤の滞在後「次の時期は、地震前二三年か四五年間のこと」で、最も多くの文人が鵠沼に滞在した時期となる。文人たちは雄大な風景式庭園を有した東家に逗留したほか、吉屋信子・島田清次郎の二文人は中屋という旅館の本館3階と離れ（「玉座」と呼称された）に各々長期滞在した。岸田劉生の滞在も同時期（大正6～12年）であり、「劉生日記」には鎌倉あるいは東京から訪れる白樺派文人たちとの多彩な交流の様子が記されている。

③ 貸別荘の経営

「劉生日記」においても知人たちが貸別荘を求める場面が頻繁にみられるが、地元有力者による貸別荘群は別荘内の一街区を形成していたと思われる。岸田劉生の住んだ「松本陽松園」、「林別荘」と称される貸別荘群、林達夫が大震災前に居住した「四軒別荘」、椿貞雄が住んだ「八軒別荘」などである。岸田劉生の場合、大正6年の鶴沼への転居以来4ヶ月ほど「佐藤別荘」（大正4年1～9月当時武者小路実篤が居住した）という二階建ての別荘ですごし、その後「松本別荘」（現・鶴沼松が岡3-7-14）に移った。「松本別荘」について劉生は「（中略）活動小屋の裏あたりの通りに面して綺麗な暗緑色の二階建ちの一寸大きい洋館があった。そこが貸家なのだ。（中略）入口からすぐ広い階段になっていてそれがダイリ石で出来ている。これは素晴らしいと思い、二人してその高く広い階段を昇って行く、実際立派な家だ、全く安い」（「劉生日記」大正8年8月7日）と記している。「松本別荘」は当時まだ鶴沼では一軒しかなかったという二階建て洋館付きの貸別荘で、劉生はここで幾作もの娘・麗子像を制作した。

（2） 関東大震災後

① 住人構成の変化

今井達夫の「鶴沼にいた文人」（前出）によると「例の震災は鶴沼の顔を変えしまった。（中略）鶴沼の文人は鎌倉へかたまるようになった。長く住んでいた岸田劉生も鎌倉に移った。（中略）そのひっそりした鶴沼に天邪鬼のように住んだのだが、芥川龍之介だった」という様に住人構成にも変化があった。文人たちに代わって東京を逃れてきた都市中産階級の人々が住まい始め、戦後ほどではなくとも大震災は鶴沼に大きな転機をもたらした。

② 鶴沼内の別荘・住宅地分譲の活性化

大震災後の鶴沼開発は、「藤が谷別荘は東京の人内田今五郎氏、鶴沼の加藤徳右衛門氏の力によりて開発分譲したものなり」鶴沼の名家高松良夫は「広漠たる本邸を開放して住宅地に提供し」（加藤徳右衛門「藤沢郷土史」昭和8年）とい

うように個々の人の開発の集積によって進んだ。下記に「藤沢郷土史」にもとづく昭和初期当時の鵠沼内の別荘・住宅分譲地を列挙する。（場所；地主）高松通・中東新道住宅地；高松良夫、高瀬住宅地；高瀬彌一、鵠沼海岸別荘地・富士見丘住宅地；伊東縫子、鵠沼海濱別荘地；田中耕太郎・秋山正男、鵠沼林間別荘地；関根善太郎、一本松住宅地；関根国松、大東別荘地；関根守太、藤ヶ谷別荘住宅地；木村泰治

また奥田操「鵠沼海岸」（昭和12年）によれば「田中耕太郎というのが貸家五十軒」を所有し、「別荘は八百徳の裏道に入ると沢山ある。（中略）7月の初頃には大概都会から多くは東京から避暑客が来て空き家はない」というように貸別荘経営は大震災後も盛んであった。これらの別荘群は都市中産階級の人々の夏期生活の場を提供していたと考えられる。

③ 居住地域の拡大化

昭和 4年の小田急江ノ島線の開通は、町の中心を小田急鵠沼海岸駅の方へ南下させ、商店街の発達などの影響をもたらした。また昭和 4年頃から、辻堂西方の別荘地造成、さらに昭和14年片瀬西方の約 9万5,000 坪、辻堂海岸の浜見山・地藏袋方面に約13万2,000坪というように別荘地は鵠沼周辺でも拡大化していった。

3 — 2 . 別荘の様相

別荘のついて、大震災前の鵠沼は「皆茅葺きにして間雅愛すべし」（明治31.8.20 「風俗画報」）という様に、あるいは岸田劉生が描いた大正期の風景画の様に松林に茅葺きの別荘が点在する光景が象徴的で、より新しい別荘に瓦葺きが多く用いられたと思われる。しかし、関東大震災が別荘に多くの大被害をもたらした、鵠沼開発始まって以来の再建設期が訪れる。その際注目されるのは、別荘あるいは住宅の洋風化である。現存で確認できる鵠沼周辺の洋風住宅は一例（鵠沼海岸1-9、内藤家の輸入組立家屋・大正 8年建設）を除き全て大震災後の建設であるこの洋風化について百両山別荘地と呼ばれた地域に昭和 7年に完成した渡辺邸

(旧・下藤ヶ谷、現・鵜沼松が岡 1)(設計・三井道男)を一例にあげる。

当時渡辺家は東京麹町に本邸を構えており、明治30年代後半、大給近孝子爵から鵜沼の土地を購入(約 7千坪)して別荘を有し、昭和初年に常住化した。

4. 結び

明治20年前後には砂丘に過ぎなかった鵜沼は、松苗の植樹や大給子爵の御用邸誘致構想はじめ様々な人々の努力や才知によって良好な別荘地としての基盤がつくられた。そして大正期・大震災前には華族の別荘建設、文人たちの逗留などがその住空間を特徴付け、大震災後には別荘・住宅の洋風化、住人構成の変化、居住地域の拡大化などが進んだ。鵜沼の発展については、別荘地を出発点にしたその豊かな住空間が戦後に至るまで保持されてきたことが、特筆すべき点である。

その II

— 明治・大正期における鵜沼の都市化 —

1. 研究の目的

鵜沼は、鎌倉、葉山、茅ヶ崎、大磯などととともに、近代における別荘地のひとつとして発展してきた。現在に至っては、別荘地というよりむしろ成熟した住宅地として認められている。一見何気なく整備されたように思われる住宅地であるが、発展当初の歴史は明治維新以後の様々な社会現象と連動している。また隣接する別荘地が自然発生的であるのに対して、鵜沼の住宅地は大給子爵らによるひとつの開墾意図が認められる。そこで本稿は鵜沼の開発初期の経緯を取上げ考察する

3 — 1. 大給子爵と鵜沼海岸

大給子爵は江戸時代においては、豊後大分府内の21,000石を有する譜代大名であった。鵜沼の開発に直接関与したのは大給近道(安政元年生～明治35没)と近孝(明治12年生～昭和33年没)の時代である。鵜沼海岸から辻堂にかけての砂地の海岸は、徳川幕府の鉄砲隊の射撃訓練場であったが、大給家は鉄砲訓練の責任者であったため鵜沼という土地との関連も生じたようである。そして明治

期に大給家が鵠沼の土地を購入または管理した動機として伝えられているのは、御用邸誘致の構想である。明治22年頃、当時宮内省では鵠沼海岸は御用邸の候補地となっていた。鵠沼の土地のいくらかは維新以後大給家の世襲財産であったと思われるが、御用邸誘致のための大給子爵は土地を新たに購入し、同時に御用邸の候補地として別荘全体の水準を上げるため当時の名士、財閥に買うよう奨めたという。しかしながら御用邸は土方伯爵の推奨により明治27年、葉山に決定したため大給子爵の構想は中断し、土地を開発・分譲して資金を回収する必要が生じた。このような背景のもと作成されたのが、大給子爵作成の大地図であると伝わる。

3 - 2 大給子爵作成の大地図

土地分譲の目的のもと大給子爵によって作成されたという地図は、和紙を貼り合わせた畳二畳大の大きさで、地割りを行った土地一筆ごとに地番の記入がある大地図をつくるため実際に測量・区割りして作成したのは、木下米三郎という人である。木下家は建築師を生業とした家で、先代は岡山藩の池田家に出入りし池田家と一緒に上京した。この関係で宮内省の仕事を担当するようになり、大給家や藤堂家にも仕えることになった。

地図全体が示す区域は、下岡・下藤ヶ谷周辺（現在の松が岡1丁目から4丁目、及び藤が谷3丁目に相当）である。これより以南は貸別荘を多く所有していた田中家がその多くを占めていた。所有権の変遷、実態を把握するのは史料の制約から困難だが、大給家の世襲財産であったのは地図の示す区域のうち3,000坪程（現在の藤が谷3丁目辺り）の様である。地図作成の年代については、次のように考えられる。葉山御様邸の決定（明治27年）以降大給子爵による土地分譲は本格化したこと、5-（1）で述べる賀来神社の木札（大正10年10月）によると明治38年の賀来神社の建立は「開拓ノ初メ守護ノ為」であること、地図には明治35年設置の江ノ島電鉄鵠沼海岸駅の記載が無いこと、などをあわせると明治30年

～35年の作成であろう。

結果的に大給子爵による御様邸誘致の構想は失敗に終わったが、これを契機に以後鵜沼の開発はすすみ、当時の新聞記事には次のように描かれる。

同記事によっても大給子爵が広大な土地を所有し、「開放主義」によって土地を貸与・分譲したことが鵜沼の発展を促したと判る。文中の伊東将行という人物は大給子爵と共に鵜沼の開発を行った人である。伊東は、明治戊辰戦争に幕府軍に加わって上野で戦って敗れた旧紀州藩士伊東三衛門であると伝わる。上野で敗れたのち一時期埼玉県川越方面に隠れたが、東海道を旅して鵜沼海岸を訪れたのを契機に生業を求めて明治19年当地に移住したといわれ、大給子爵との関係については不詳であるが、どちらも旧幕勢力であることから師弟関係にも似たつながりが生じたのであろう。また文中の旅館あづま家（東家）は伊東が鵜沼発展の基点のため興した旅館である。

3 — 3 鵜沼別荘地内の土地購入

大給子爵、伊東将行の努力によって、多くの東京在住者が土地の分譲を受けたと考えられる。土地分譲は1町単位で売られ価格的には低廉であったが、松苗を植える条件が合ったという。各時代ごとに別荘所有者・居住人には多少の変化があり、大給子爵による華族の誘致のあと、明治末期になると横浜の生糸商などが増えていき、さらに大正期に至ると文人などが多く訪れるなどの居住階層の変化があった。大橋良平「現在の鎌倉」通友社（明治45年）によると、鵜沼の別荘所有者の氏名は次のようになる。華族では、藤堂高紹（伯爵）、大給近孝（子爵）長谷信義（子爵）、四條隆平（男爵）、文官では、道家斎（農商務省水産局長）中島行孝（市会議員）、鈴木祐三（海軍医官）ほか4名、銀行会社員では、益田信世（三井社員）、伊東幹一（会社重役）、佃一豫（興業銀行副総裁）、郷誠之助（東株理事長）、川崎金三郎（川崎銀行頭取）岩垂邦彦（東京電気会社取締役）、吉田三郎右衛門（留萌炭鉱重役）、田中平八郎（田中銀行主）下平村田峰次

郎（三井社員）ほか 6名、さらに53名である。

又鵠沼・賀来神社境内の「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」（大正 9年）に基づく初期別荘所有者の氏名を次に掲げる。藤堂高紹、（侯爵・旧島津藩主）、蜂須賀承茂（侯爵。旧徳島藩主）、久松定謨（伯爵・旧松山藩主）小田柿捨次郎（三井物産参事長）郷誠之助（東京電灯社長・日本工業倶楽部専務理事）、田中銀之助（田中銀行・東洋鉱山取締役）、馬越恭平（三井物産横浜支店長、大日本麦酒社長）益田孝（三井物産総括人）ほか 7名。このうち馬越恭平は早い時期から定住したようだ。また蜂須賀侯爵は土地は購入しているが別荘は所持しなかったと思われる、益田孝の場合は自身の別荘地購入というより社員のためのものであろう。

華族の別荘建設の様子を表した記事には次のようなものがある。「旧伊豫今治藩主久松子爵は今回藤沢町鵠沼海岸に地所数千坪を購入し伊東将行氏監督下に別荘工事中なり邸内には天然の沼地ありて其廻りには松あり景趣に富めるを以て落成の上は鵠沼第一の別荘たる可し」（横浜貿易新報 大正 3年 4月26日）

大給家の別荘も明治末期に木下家や東家が出資して建てられたが、ごく短期間しか訪れなかったという。各別荘の内容を明らかにする史料は乏しく、関東大震災では大半が倒壊した（民家と異なり別荘の多くは瓦屋根であった）大震災前から現存する別荘には、商工会議所のサンプルとして輸入され、近隣では通称「組立家屋」とよばれた洋風住宅（大正 8年建設・現在の鵠沼海岸1-9）がある。

4 — 1 鵠沼（こうしょう）館と東家

大給子爵の御様邸誘致の構想の一方、もうひとつの鵠沼海岸地区の開発は鵠沼館（明治19年頃設立）という旅館の開業からはじまっている。建物は藤沢大鋸にあった旅館「大鈴木」を移し建てた（鵠沼海岸 2丁目11番地）ものであった。その発起人は三觜小三郎、川上九兵衛、加藤徳右衛門といった地元有力者で、後に伊東将行が加わった。鵠沼館の設立もまた、東京在住の財界人を誘致することにより、「武相倶楽部」という有史の会を組織したのもその目的達成のためであっ

た。鶴沼館が軌道にのったのち、伊東将行は東家（明治25年竣工）という旅館を新設した。（現在ある東家とは場所、経営者など異なる）他に田中耕太郎による対江館が起こされ、鶴沼館、東家の三者が発展を競った。そのなかでも在京の財界人、知識人の関心をよんだのが東家である。

東家は、江ノ島はもとより北に丹沢、西に箱根の連山、富士山を借景にし、南には三原山の噴煙を眺める風景式の日本庭園を有した。建物は二階屋になった母家三棟のほか離家などから構成され、その様相が「風俗画報」（明治20年 8月第97号）に描かれている。又「其殿堂の広大、建築の美、調度の高尚さは湘南に冠たるもの如何に高位高官の接待も決して躊躇せざるものと我町の誇りであった」（加藤徳右衛門「藤沢郷土史」昭和 8年）しかしながら伊東将行が大正 9年病没してのち東家は、大正12年の震災で全焼し、再建されたものの戦時中に廃業した。

4 — 2 文化人の交流の場としての東家

長谷川栄の経営した東家には多くの文人・画家が訪れた。長谷川欽一の記憶では里見、久米正雄、武者小路実篤、芥川龍之介、菊地寛、岸田劉生、木村壯八などをはじめとし、ほかに与謝野晶子、谷崎潤一郎、志賀直哉も訪れたようだ。これらは後期浪漫主義及び白樺派の人々を中心としている。里見は「潮流」、岸田劉生は「鶴沼日記」、芥川龍之介は「鶴沼雑記」においてそれぞれ鶴沼を舞台にした文章を書いた。

5. 鶴沼別荘地内に建立された賀来神社について

(1)賀来神社の由来と大給家

賀来神社はもともと大給子爵の国元である豊後国大分郡府内由原八幡宮の摂社ある。承和 2年（852）由原八幡宮の境内に16代仁徳天皇および皇后と武内宿弥命を鎮斎して「善神王宮」と称した、この「善神王宮」を貞観11年（869）当時の国司が賀来村に移し「賀来神社」と改称したのが賀来神社の縁起である。そ

ののち賀来神社は、大給家において安永 8 年（1779）に豊後国来村から江戸神田
淡路町の本邸内に御分霊が勧請された。またさらに明治 5 年、大給家では邸地を
開放したために、別邸のあった本郷駒込千駄木坂下町に遷座し、また相殿に稲荷
神社を遷座した。しかし、千駄木の土地は低く狭かったため、大給近孝、伊東将
行両氏により、明治38年神奈川県高座郡鵠沼村下藤ヶ谷の当地に、再度遷座され
た。登記簿では明治39年10月 9 日付で土地が寄付されている。現在では 300 坪程
度の敷地内に、間口八尺、奥行六尺の質素な本殿が建ち、境内の一段低い所に「
鵠沼海岸別荘地開発記念碑」の碑が建っている。

また賀来神社の木札（大正10年10月）には、「・・・（略）明治38年 8月東京
府ノ許可ヲ経テ子爵大給近孝、伊東将行鵠沼開拓ノ初メ守護ノ為メ當地ニ移シ鎮
守トス・・・・（略）」（奥田操『鵠沼海岸』P. 135-6 昭和12年）と記録があ
り、大給子爵による鵠沼の本格的な開発が明治35年の江ノ島電鉄の開通直前頃に
始まったと理解できる。

(2) 「鵠沼海岸別荘地開発記念碑」の内容・・・・・・一部略す

碑文には 3 - 3 で述べた初期鵠沼別荘族の名が記述され、鵠沼開発の経緯と伊
東将行の功績が讃えられている。ここに大給子爵の名が全くないのは、開拓碑建
設が東家の実際の経営者であった長谷川家と伊東家の遺産相続をめぐる和解をひ
とつの目的としたためともいう。あるいは大給家が当時宮内省の式部職に就いて
いたため表面にださなかったということも考えられる。いずれにしても賀来神社
の由来、土地分譲のための大地図などから大給子爵が鵠沼開発の初期功労者であ
ったことは相違ない。

6. まとめ

現在の鵠沼は敷地の細分化が進むものの、松と竹林が残り独特の風情をもつ住
宅地を形成している。中には広大な敷地に松林と門柱だけが残された敷地もあり
かつての行まいが偲ばれるある意味で鵠沼の栄華は過去のものであろう。しかし

ながらこのように風流な昔を偲ばせる住宅地は今となっては数少ない。また現代的な意味で成熟した鵠沼もかつては砂の飛ぶ荒れ地であり、松苗の植樹からその開拓が始まっている。開拓当初には、大給子爵らの御用邸誘致の構想、東京の文化人を招客しようとした鵠沼館・東家の開設などの動きがあった。その結果として残ったのは地割の面積上の豊かさ、住宅地としての風情、文学の舞台としての鵠沼、いずれもがのちにはこの住宅地にとって名誉な条件となった。また賀来神社の遷宮などは、土地開拓に伴う守護神の設置であり、近代における伝統的風習として興味深い。以上の鵠沼の発展過程については、別荘地の歴史としてだけではなく、ひとつの良好な郊外住宅地の発展過程としてとらえられる。

終わり

鵠沼南部の道

佐藤 和子

この記事は平成7年度の公民館祭りに「鵠沼を語る会」として展示発表した記録である。協力者は有田裕一、高三啓輔両氏である。

特色

この一帯は明治の前半頃迄、砂丘や砂地、点在する池や湿地で占められ、開発の進んでいない土地であった。そのため「道」として地形図（明治15年迅速図）で確認出来るものは、本村から入ってくる幾筋かの小道があるのみで、中でも目を引く比較的是っきりした道は、本村から現鵠沼中学校前を通り、宮崎通りを横切って川袋に、さらに片瀬川へと続いている。往時の鎌倉道の一つであろうか。この道は明治大正にかけては、片瀬山迄、たき木とりによく使っていたという話を聞いた。・

・・地図①

現「鵠沼海岸、松が岡、藤が谷、桜が岡」付近はまだ砂山や、湿地が多く残り、荒地であったため開発は進まず、踏み分け道のような小道を一本、砂原の途中までたどることが出来る。これが堀川方面から海岸通りへ至る道の原形と思われる。・

・・地図②

本村の道は、古い集落と集落、耕地等を結ぶ道として形づくられていたのに対し、海岸一帯の道は、別荘開発に伴って出来ていた碁盤目状の計画道路となっている点が目立つ。〔注〕明治20年前頃の地図参照。

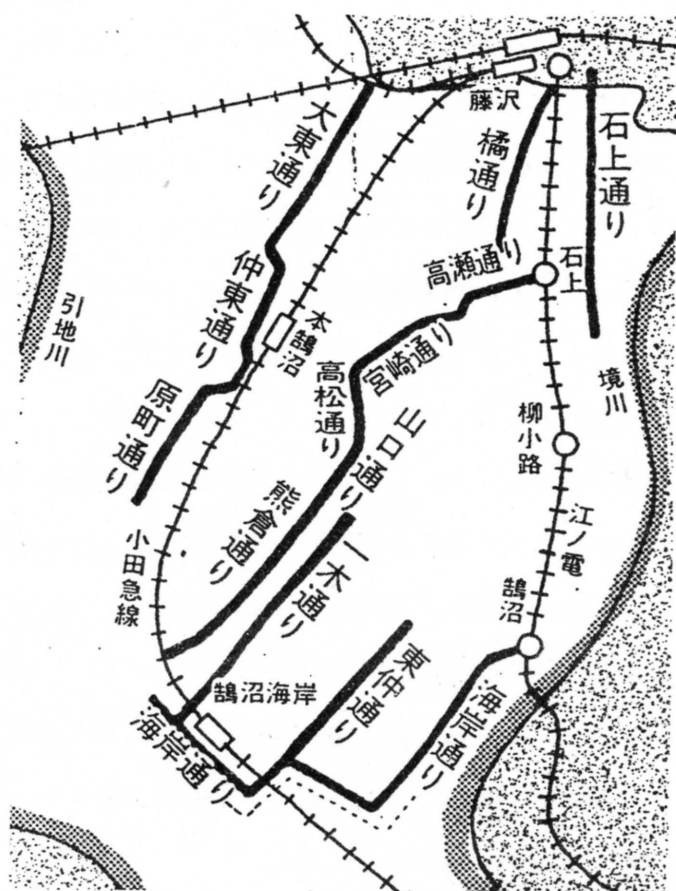
展示内容 I

◆ ①明治15年、②大正10年、③昭和26年、④現在と4枚の地形図を拡大展示。これにより砂丘、田畑の減少、住宅地化の拡大、河道の変化、鉄道の敷設等の社会情勢の発展と道の変遷を表わした。古くから開けていた本村に比べ、南部砂丘地帯は砥上原（とがみがはら）と称され、江戸時代は幕府の鉄砲場にもなっていた。しかし、その風光明媚な環境、温暖な気候、東海道線の開通、等々により明治20年代に入ると、保養地として注目されるようになった。大給（おぎゅう）氏、伊東氏、三背（みつはし）氏等により開発が進められ、特に松苗を植えるという条件で、かなり低廉な価格で分譲された模様。同時に「道」もつけられたが、ほぼ北東から南西方向に走る砂丘列の間に縦の道が、そして砂丘を横切ってそれらの道を結ぶ横の道が残されている。東仲通り（現天金通り）海岸通り（江の電鵜沼駅前から海岸方面大曲りまで・・・注。小田急線開通以前は、この道を通して、海岸方面へ出ていたため、これが海岸通りと呼ばれていた）なども計画的な道のひとつである。

◆ 大正に入り、高瀬弥一氏が藤沢駅から海岸へ至る道の開発に尽力された。お子さんの高瀬笑子氏のはなしは次のとおり（鵜沼断想より）

「川袋に広い土地を買い（大正8年）、自分の家をつくってから、父のした仕事の第一は、道路を敷くことであった。いまでも高瀬通りとよはれている道が手始めである。次は藤沢駅から鵜沼海岸への道路を計画した。2970坪ほどで、是が非でもこれを完成させようとした。橋通りである。そのころの鵜沼は、松林と桃畑、麦畑、芋畑、西瓜畑であり、道路を敷くと、農家は大きくもなれない畑をとられることになり、強く反対した。・・・それで父が買上げて道路にした部分がたくさんあった。父の話を理解して喜んで土地を提供して下さった方の名を父は××通りと名づけ、記念してのこしている。・・・父の初めの計画では、もう二間広い道を考えていた。・・・私費を投じてつくった二十七丁の道路をその当時の心ある人は・・・」〔注〕”わたしの藤沢”No.22・1989, 11頁「あの道この道」より。

この名前の異なる一本の道には昭和6年頃、藤沢駅南口から「鉄道省海の家」迄



海水浴客を運ぶバスが走っていた。

◆ 鶴沼海岸商店街は、大3年頃より東屋、中屋という旅館にやって来る客達や「江の電」で海に来た人達を相手に店が出初めたが、所々に砂山が残ったりしていて、夏の客相手のささやかな店々だった。それでも当時は鶴沼海岸大通りと称し、または鶴沼銀座通りなどとも言っていた。

その後、昭和12年商店街の形を整え鶴栄会の名称になった。

「一木通り」は一木氏によって、溝川が埋め立てられて開かれたもので、氏の名をとっている。(昭和6年頃)

◆ 現在の主要道路

鶴沼の東端を走る片瀬県道は、昭和2年藤沢より鶴沼迄完成。海沿いの国道134号線は、時の失業救済対策事業として、片瀬一大磯間が着工、開通当初は車の姿もなく(昭和6年着工10年完成)遊歩道路、逍遙道路とも呼ばれていた。大風が吹くと道は砂で埋まったそうだ。更に海側には「乗馬道」があり、当時避暑客らが馬を走らせた道があったが、現在では残っていない。

昭和30年代に入ると、日の出橋から片瀬に至る道(134号線に平行した一本内側を走る道)が整備され現在に至る。かつて肥上(こえあげ)道とも呼ばれ、鶴沼村や辻堂村の人達が片瀬・江の島の旅館などから下肥を運ぶのに通った生活の道という。

北側に古川が流れていたが、現在は暗渠となり、道巾も拡げられた。鵠沼の西側を走る湘南（鵠沼）新道は、東京オリンピック直前の昭和38年、藤沢橋から国道 134 号線に通ずる縦の幹線道路として畠の中を通して作られた新しい道である。

展示内容 II

◆ 開発された道路を新旧の写真で比較した。

大正時代（6～12 年）鵠沼に住み、一連の麗子像と共に当時の”鵠沼風景”を描いた岸田劉生の作品から、その数点を選んで、現在の同じ位置と思われる風景の写真と並べ比較した。

◆ 明治末から大正にかけての別荘の分布図。

別荘の位置とともに、計画的につけられた道の様子がよくわかる。

◆ 「大藤沢復興地図」現物をコピーし同様に着色。

大震災直後の藤沢一帯の様子がうかがえる興味深い地図。

展示を終わって

明治の前半頃迄は、あまり人の手の加わらない自然の十二分に残った鵠沼も、徐々に保養地、別荘地として開かれていった。第二次大戦後は東京、横浜等で家屋を焼失した人達も移り住み、現在はその方面へ通勤する人達のベツトタウンとして大きく様変わりしている。松苗を植えた大きな区割の地も、相続等による細分化が進んで、かつての松を始め樹木もだんだんと減少し、良い意味での『鵠沼らしさ』が失われつつある。鵠沼の道の狭さと判り難さは度々指摘されるが、このような経過をたどって形成されたことを思い、今後これ以上『鵠沼らしさ』を失うことの無いような発展を望みたい。

おわり

鵠沼の古道「江ノ島道」を歩く

平成8年5月

鵠沼を語る会々員 川上恵久記

「江ノ島道」とは江戸時代大山詣りをした人々がその帰り道、江の島の弁天様を参詣する為に通った道で、明治8年6月5日太政官の皇国地誌編輯例則に基づく「皇国地誌村誌相模国高座郡鵠沼村」に次のように記載されている。

○東海道往還 北ノ方本郡羽鳥村ヨリ引地橋ニ来リ東北々字車田ヨリ藤沢駅へ及ブ其長三百五十間幅四間

○江島往来 東ノ方本郡藤沢ヨリ本村字石神ニ来リ南へ四百式十五間幅式間東南東山本橋ヨリ片瀬村へ達ス

○江島脇往来 東北々字車田ニテ東海道ヨリ更ニ東南へ千三百三十五間幅式間東南東字石神ナル山本橋ニ至ル。

今回たまたま鵠沼公民館での秋の公民館祭に我々の「鵠沼を語る会」では鵠沼の古道についてそれぞれ分担し調査、展示することとなり古道「江ノ島道」を上記「皇国地誌」にそい、車田を起点として平成7年7月26日寺田良夫、鈴木武夫両氏と共に歩き、以下これを記録する。

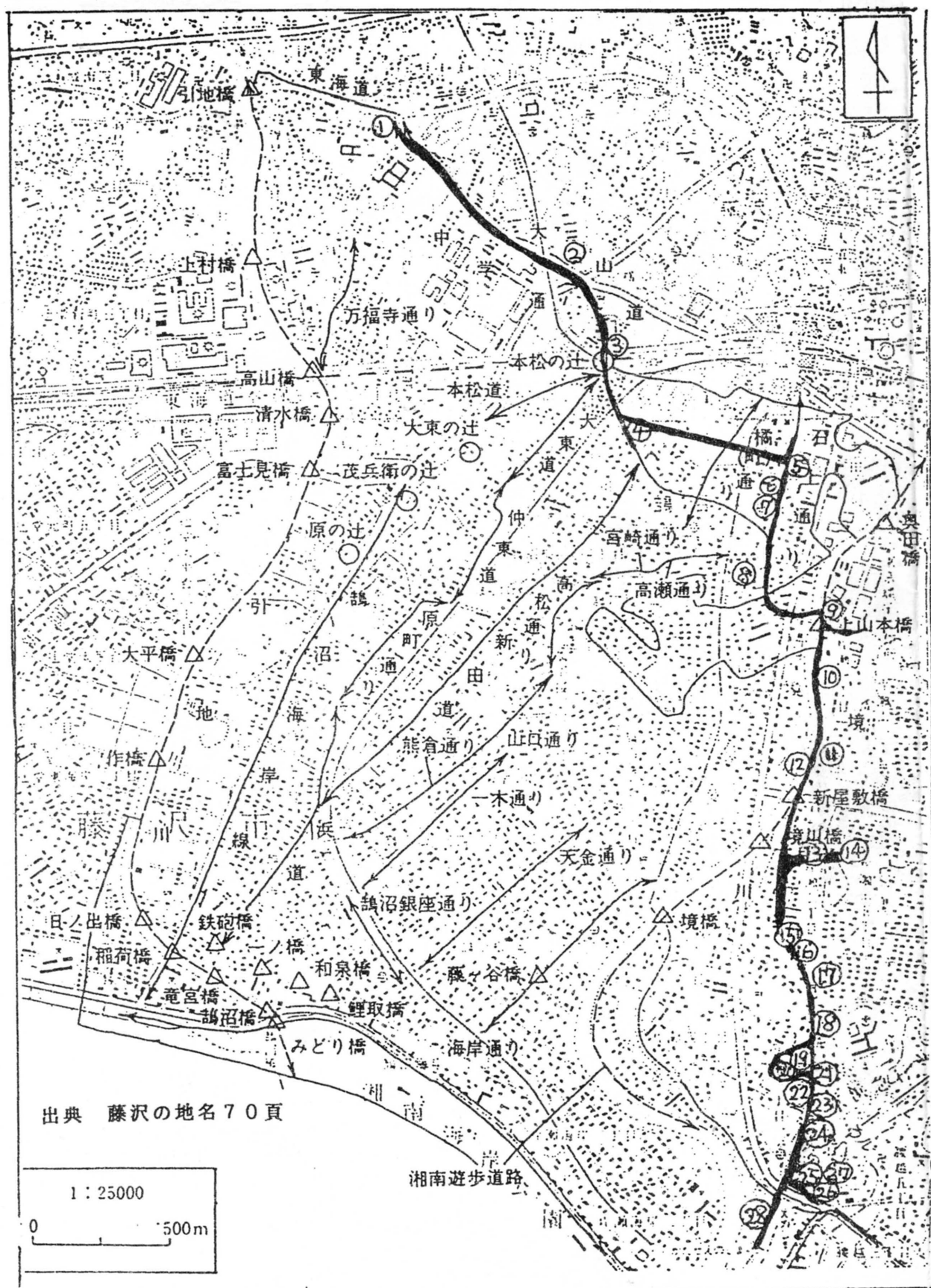
歩いた順路

(1)車田ー(2)六本松古戦場跡ー(3)一本松踏切ー(4)鵠沼橋の辻ー(5)砥上公園ー(6)石上通りー(7)石上神社(砥上明神)ー(8)渡し地の蔵ー(9)上山本橋ー(10)大源太の辻ー(11)馬喰橋ー(12)境川に沿った江ノ島道ー(13)岩谷不動道標ー(14)岩谷不動ー(15)泉蔵寺脇江ノ島道道標ー(16)泉蔵寺ー(17)諏訪神社上社ー(18)密蔵寺ー(19)密蔵寺前の辻にある江ノ島道道標ー(20)一遍上人地蔵堂跡ー(21)本蓮寺ー(22)片瀬市民センター前の道標ー(23)西行の戻り松ー(24)常立寺ー(25)龍口神社ー(26)龍口刑場跡ー(27)龍口寺ー(28)州鼻通り

註 地名の始めに掲げた数字は掲載した地図の場所を示す。

(1)車田

引地橋より東海道を藤沢方向へ向い、湘南高校入口の信号を右に折れると、湘南高校の脇にある車田白旗稻荷に出る。境内に



は二十三夜塔、庚申供養塔(元禄二年銘1689)、板碑等の石造物がある。

地名の由来

○伊勢神宮に納める米を作った田で車の輪のように順番に廻り作りをしたためという説。

○昔の引地川が度々流れを変えたため車の輪のように田が移り変わったという説。

○小栗判官を乗せた手車を作ったところだからという伝説。

○廓があったので廓田といい、それが車田になったという説。

車田より湘南高校のわきを通り、日本精工の裏に出て小田急線のガードをくぐって行くと左手に湘南通一丁目公民館がある。

ここに六本松古戦場の掲示がある。

(2)六本松古戦場跡

治承四年伊豆に旗上げた頼朝が鎌倉へ討ちいりのおり大庭三郎景親の軍勢と激戦を交え敵味方ともに多数の勇士が討ち死にしたといわれる場所で此の地の住民がねんごろに供養した塚がある。

これよりしばらく行くと、戸塚、茅ヶ崎線に出る。これを渡りすぐ右の路地を入り間もなくJR東海道線の線路に出る。

(3)一本松踏切

昔大きな一本の松があった辻で現在はJR東海道線の藤沢駅より辻堂よりにある一つめの踏切。

踏切を渡り二つ目の路地を左に曲がり小田急線藤沢駅より二つ目の踏切を渡りまっすぐ行くと三叉路に出る。

(4)鵜沼橋の辻

この辻にこの地の講中が正徳五年(1715)に建てた庚申塔がありその塔の右側面に右江ノ島道と刻まれている。

此の道を右にとると石上の渡しに通ずる。

今回は左の道に行く。

橋通りを越え広い通りを江ノ電の下をくぐりしばらく行くと石上通りに合する。その左手右に砥上公園がある。

(5) 砥上公園

此の公園には各辻々にあった多くの石仏が集められている。

(6) 石上通り

ここで藤沢本宿遊行寺の前にあった江の島一の鳥居より来た道に出会う。

ここを南に石上通りをしばらく行くと石上神社が右手にある。

(7) 石上神社（砥上明神）

鵜沼を中心とした此の一带は天平時代（735年頃）「高座郡土甘郷（たかくらごうりとがみごう）」と呼ばれ、鎌倉時代には「砥上（とがみ）が原」とよび西行法師や鴨長明も砥上が原の歌を残している。この辺りの開発の祖、鎌倉武士を祀った神社で度々水に浸り、昭和九年に現在地に移された。

ここを南に行き、高瀬通りを越えしばらく行き、三叉路を右に入ると石上の渡しの地藏がある。

(8) 渡しの地藏

江戸時代に入り江の島、大山詣りの道筋として境川も此の辺りまで入り込んでおり、舟の渡し場として賑わい、旅の安全を祈念し建てられた鵜沼における最古（承応4年、1655年作）の石仏。

もとの道に戻り、石上通りに出て、さらに南に行き、片瀬通りを越えると境川に架る上山本橋に出る。

(9) 上山本橋

片瀬の素封家で初代片瀬村長であった山本庄太郎氏が自費で境川に架けた橋。河口近くに下山本橋もある。

現在の橋はその後架け替えたもの。

上山本橋を越えしばらく行くとミネベア正門前の大源太の辻に出る。

(10) 大源太の辻

江ノ島の道標をかねた庚申塔（享保15年銘、1730）があり、此の先少し行くと遊行寺より村岡川名を抜けて来る「江ノ島道」との三叉路に合する。

(11)馬喰橋(うまくらいばし)

昔、源頼朝が橋のない川に馬の鞍をかけて渡ったという伝説から馬鞍橋、ここへ来ると馬がいなくてすぐ死んでしまうという伝説から馬殺橋、又ある行者が橋の石を調べたところ石の裏に阿弥陀如来の梵字が書かれており、その石を山に埋めたところそれ以来馬が死ななくなったという伝説より念仏橋とも呼ばれている。

この橋の下流にかけての川岸が、昔河岸と呼ばれた船着場で、片瀬港とも言われ、小さい舟が出入りし、江の島西浦に停泊していた大きな船との間を往復し荷役をする重要な場所であった。

(12)境川に沿った江ノ島道

此の辺りしばらくの間「江ノ島道」は境川に沿って行く。

新屋敷橋を通る片瀬山に通ずる道を越えると、左手に岩谷不動尊道標がある。

(13)岩谷不動尊道標

この辻を左に入ると岩谷不動尊があることをしめす道標。

(14)岩谷不動尊

不動尊の道標のある辻を左に折れしばらく行くと左にあり、正しくは石龍山不動尊と言う。弘法大師が修業のため岩壁に穴を掘り籠ったところと伝えられ、中には石造りの不動像が祀られている。

またもとの道に戻り江の島方面に向かう。

(15)泉蔵寺脇江ノ島道標

ここには江ノ島弁財天道標と数基の庚申塔が建てられており、この道標は江戸時代に、管鍼術を創案した杉山検校が、江の島詣りの道標に、また道中の安全を祈って建てたものといわれ、かつては「江ノ島道」の随所に建てられ、とくに藤沢からは一丁目ごとに四十八ヶ所あったと言われるが、現在は市内に10基残されている。

(16)泉蔵寺

嘉禄年間(1225~27)北条義時の嫡男泰時の創建と言われる真言宗の寺。相模国準四国八十八箇所(八十八ヶ所)の四十三番札所。

ここよりさらに南に行く。

(17)諏訪神社上社

創立は養老七年(723年)信濃諏訪大社より他郷への最古の御分霊社として勧請された神社と言われている。

ここより右手下の方角に下社がある。

さらに南に行き小学校の脇にあるのが密蔵寺。

(18)密蔵寺

嘉元年間(1303~06)頃創立された真言宗の寺。相模国準四国八十八箇所のうち十七番札所。境内に弘法大師の石像がずらりと三十余体も並んでいる。

(19)密蔵寺前の辻にある江ノ島道道標

安永九年(1780年)の銘のある庚申供養塔が建てられており、其の左右の側面に「左鎌倉道」「右江ノ島道」と刻まれている。

(20)一遍上人地藏堂跡

さきの辻を右に入りしばらく行くと左手に雑草のしげった空き地があり、一本の標柱が建っている。ここが時宗の開祖一遍上人が弘安五年(1282)時の幕府により、鎌倉に入るのをはばまれ、三月より七月の間、此の地にとどまり踊り念仏を唱え布教を行なった場所と言われ、「一遍の踊り場跡」「念仏堂跡」とも言われている場所である。

(21)本蓮寺

地藏堂跡を左に折れると先程の密蔵寺の前から来た道にあう。それを左に少し戻ると本蓮寺の参道が見える。この寺は推古三年(595)聖徳太子により開かれたと伝えられる古い密教寺院であったが、源頼朝によって再建され、その後日蓮宗に改宗し、龍口寺輪番八ヶ寺の一つであった。

輪番寺とは龍口寺の近隣には日蓮宗寺院が入つあり、龍口寺住職制がひかれるまで、これらの寺が一年輪番で龍口寺を守ってきた。片瀬には、常立寺とこの本蓮寺の二つ、腰越に本成寺、勸行寺、法源寺の三つ、津に東漸寺、本龍寺、妙典寺の三つがある。

この辺りが片瀬の中心地で門前と呼ばれ、高札場もこの辺りにあった。

(22)片瀬市民センター前の道標。

またもとに戻りさらに南に進むと、右側に片瀬市民センターがあり、その前の植え込みの中に隠れるように杉山検校が建立したといわれる江の島弁財天道標が一基置かれている。

(23)西行の戻り松

センターの前をそのまま少し行くと左側路傍に小さな囲いがあり、其の中に一本のやせた松とその根本に道標がある。道標の正面には「西行のもどり松」左右と背面に「江のしま道」「一切衆生」「二世安楽」と大きく刻みつけられてある。西行法師が諸国を巡る途中この地を通り一本の枝振りの良い松に目をとめ、その姿が西の方に傾いているのを見て、都恋いしさにその枝を西の方に振り曲げて立ち去ったといわれる。また一説ではこの松の下で背負い籠をして鎌を持った子供を見、どこへ行くか問いかけたところ、子供は「冬まきて夏草を刈りに行く」と答えたまま行きすぎてしまった。西行はその意味がわからず、その後姿を見返っていた、さらに西行はこの子の答に大変感心し「こんな田舎にも利口な子がいる。これから先どんな人がいるかわからない」と都へ帰ってしまったところから「戻り松」と云われるようになった等、その他いろいろな話が伝えられている。

現在の松は4度目の植継ぎで、古くは本蓮寺の門前にあったがいつのころかいまの地に移ったと云う。

(24)常立寺

さらに江ノ島道を進むと左手に龍口山常立寺がある。この寺はもとは真言宗回向山利生寺であったが開山日豪上人により日蓮宗に改宗した輪番寺の一つである。もともとこの地は「龍口の刑場」の区域であり、鎌倉時代以降、刑場で斬刑に処せられた人々の死体を埋葬し、回向供養したところである。山門を入ると左側に「誰姿森」(たがすがもり)と刻まれた大きな供養碑があり、その前に五輪塔が五基並んでいる。これは蒙古元の大

軍が来寇（文永の役）の翌年降伏を要求して来た元の使者杜世忠ら五人が鎌倉幕府の時の執権北条時宗の指示により討ち首になり、彼らを供養した「元使塚の跡」と云われる。

この寺の前にも市指定文化財寛文庚申供養塔がある。

(25) 龍口神社

寺の前の道をさらに江の島方面に歩きモノレールの終点を左に曲がりしばらく行くと左手奥に龍口神社がある。伝説によると、深沢にあった湖に五つの頭を持った悪龍が住んでおり村人を苦しめていた。そこへ欽明十三年（552）海中より江の島が盛り上がり、天より美しい天女が舞いおり、五頭龍はすっかりこの天女（江島明神）に魅せられこれに帰服し、それ以来悪行を悔い改め村人の加護を誓いやがて山（龍口山）と化し、龍口明神としてこの地に祀られたという。

(26) 龍口刑場跡

龍口神社の右隣が龍口刑場跡で、「龍口刑場跡」の碑と、高さ2m余りの五輪塔、金文字の大供養塔が目につく。この辺りの浜は鎌倉幕府の処刑場があったところで、大庭景親の梟首、源義経の首実驗、元の使者杜世忠等の処刑など多くの人々がここで処刑された。日蓮も文永八年（1271）九月十三日早朝鎌倉幕府の手によって斬首されようとしたが、その刃に稲妻があたり、その刃が折れ、これは日蓮を斬ってはいかぬとの神のお告げと許され、一命をとりとめた日蓮はここより佐渡へ流されたという話はとくに有名である。

(27) 龍口寺

刑場跡の右隣奥が日蓮宗随一の霊場と云われる寂光山龍口寺で日蓮の「龍の口の法難」の地を記念して明徳二年（1391）から応永二十四年（1417）の頃、一説には延元年間（1336～40）頃六老僧が建てたと云われている。

(28) 洲鼻通り

また今来たモノレールの終点に戻り左折して江ノ電の踏切りを渡ると江の島の栈橋に通ずる最後の道である。洲鼻というのは片瀬川が運んできた土砂が堆積して出来た洲の先端という意味

で、この洲は江の島まで続き、干潮の時は徒歩で島まで渡ることが出来た。この通りの両側には江の島土産を売る店、旅籠が並び賑わった。

我々の「江ノ島道」探索も江の島を目の前にしてここで終わる。
(終)

参考資料、文献

- 藤沢史跡巡り (藤沢文庫刊行会編)
- 藤沢市文化財ハイキングコース
(藤沢市教育委員会発行)
- 藤沢の地名 (藤沢市発行)
- ふるさとまっぶ 片瀬江の島
(藤沢市発行)
- 藤沢市教育委員会等各地の掲示

辻堂地区の古道を歩く

平成七年十月

鵠沼を語る会々員 稲葉元成・記

これは、藤沢市発行「藤沢の地名（日本地名研究所編）」による古道の一部を、歩いたときの記録。

歩いた古道は、(1) 辻堂中道

(2) 鎌倉道

(3) 肥上げ道

(4) 四ツ谷道（別名光明真言道場道）

(5) ニツ谷道（別名光明真言道場道）

(6) 藤沢道（別名山道）

(7) 羽鳥道

(8) 折戸道

このほか、辻堂地区の外に出る古道、大山道、大磯道、小和田道は、その入り口だけを歩いた。

■参考書籍《地》藤沢の地名（藤沢市発行）

《ふ》ふるさとまっぷ辻堂地区（藤沢市発行）

《ハ》藤沢市文化財ハイキングコース

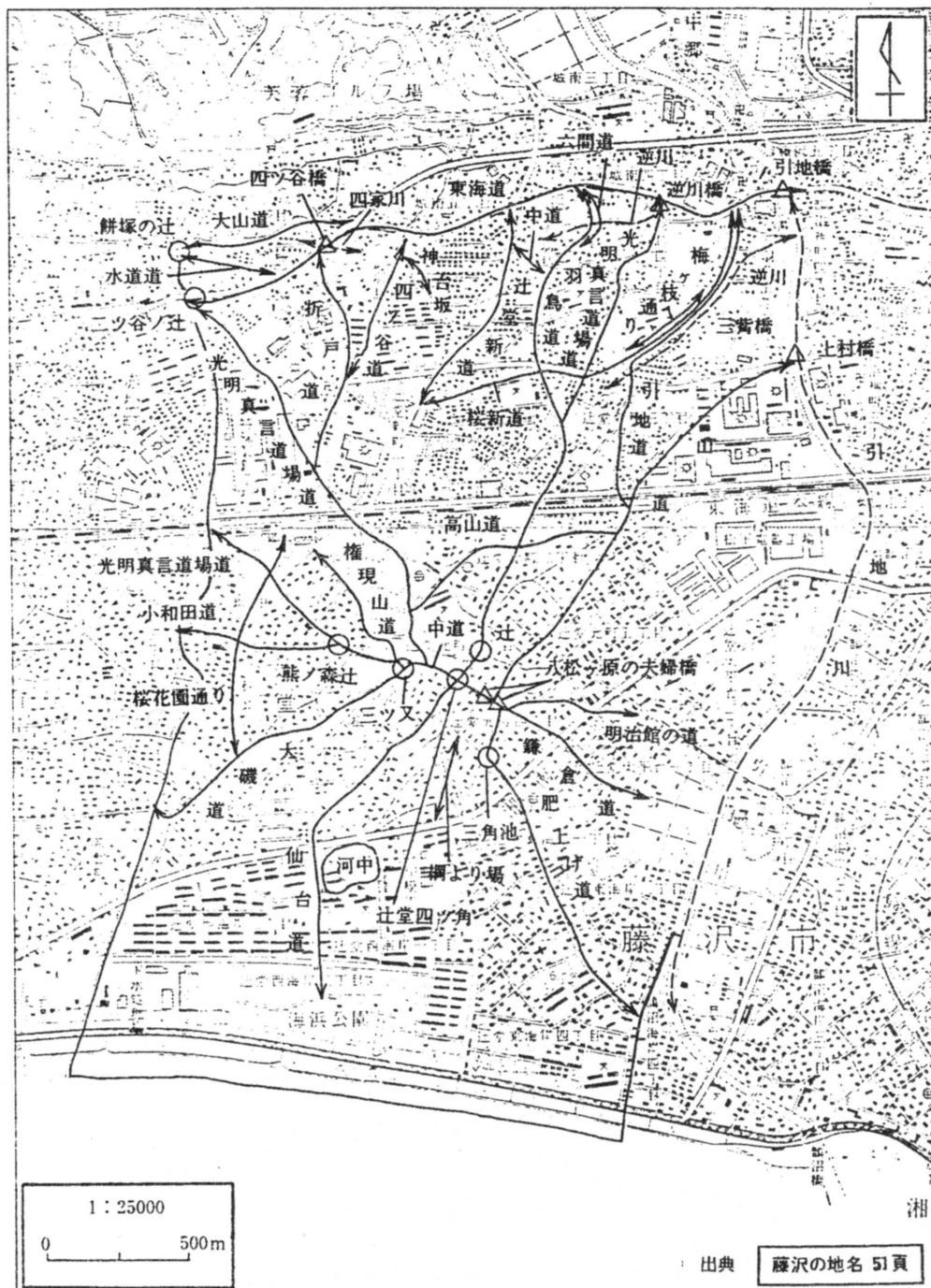
（藤沢市教育委員会発行）

《わ》藤沢「わがまちのあゆみ」

（藤沢市文書館発行）

以下文中《 》は、上の書籍引用の略号。また、寺社名のあとの(・・)番号は、後記した寺社概要の部の索引番号。

辻堂地域



(1) 辻堂中道 と 辻堂四ツ角・三ツ又

「辻堂中道」は、「辻堂四ツ角」をほぼ中央にして、東西にそれぞれ150^{メートル}位の短い距離の道。西のはずれは「三ツ又」、東のはずれは★八松^{やつまついな}稲荷神社(11)。むかしの辻堂村で一番賑わったところ。現在でも「四ツ角」のすぐ南にある★諏訪神社(12)の祭礼のときには、露店が立ち並んで賑ぎ合う。

このあたりは、現在の辻堂元町三丁目のほぼ中央で、バス停「西町」の少し辻堂駅寄りを東に入ると、2分位で「三ツ又」に出、さらに2分位で東西南北に走る道の交差点「四ツ角」に出る。

むかしの辻堂村は、「四ツ角」を中心にして東町、西町、南町、北町という集落ができ、この集落から東海道へ、藤沢宿へ、鎌倉へと道が放射状のよう

にのびていた《地》。

「辻堂」地名のいわれ。「四ツ角」の少し北のところに、むかし「辻」と呼ばれた場所があり、この辻の南側に★宝泉寺^{ほうせんじ}(13)(現在地)、北側に★宝珠寺^{ほうじゅじ}(14)(昔の位置)があつて、これらの寺を「辻御堂^{つじみどう}」と呼んでいたが、いつのまにか「御」の字が省略され「辻堂」となり、このあたり一帯を「辻堂」と呼ぶようになったと伝えられている《ふ》。現在でも宝泉寺を「南の寺」、宝珠寺を「北の寺」と呼んでいる。

「三ツ又」には、次の立て札が立っている。

三 ツ 又

この地点から八幡社前をぬけ、明治市民センターの裏を通って四ツ谷不動に向ういわゆる旧鎌倉道と、熊の森にぬける道と稲荷社の裏を通り海に山に分かれる三つの路の分岐点であったことから三ツ又といわれました。元禄十三年、検地帳四四小字の中に三ツ又があります。

藤 沢 市

立て札にある「八幡社」は、「三ツ又」のところを右に入ると、又すぐ三叉路になり、それを右に、いかにも昔からあるような細い道を行くと右側に、この八幡社がある。地元では「西町の八幡様」と呼んでいるので、昔は、このあたりが辻堂村の西のはずれだったのではなかろうか。八幡社の勧請は不詳であるが、棟札には文化九年(一八一二年)の銘がある。

「三ツ又」の右の道を約50[㍓]位行くと、左側に★稲荷社があり、この前を真つすぐ行くと、現在の道では「八幡社」からの道と合流し、★四ツ谷道(4)又は★二ツ谷道(5)となる。

「稲荷社」の手前を左に入るとすぐ辻堂駅からくるバス通りに出る。これが古道の★小和田道の入口だったようだ。

「三ツ又」の立て札に向って左手、三叉路を左に入るところに★八森稲荷^{やつもりいなり}があり、この先を左に入る道が海の方に行く道で、古道★大磯道の入口と思われる。

「三ツ又」の立て札の手前右側、桜井さん宅の東側の塀に沿った幅1[㍓]位の狭い路地を入った突当りに★白山神社^{はくさん}(15)がある。

「中道」の東は^{やつまつ}ずれ八松稲荷神社の少し手前、これと向い合って通称^{デンバタサマ}田畑社と云われる★社宮神^{しゃぐうじん}(16)がある。

「四ツ角」から南へ、宝泉寺と諏訪神社の前を^{ごれい}通って約100[㍓]のところには★御霊社がある。辻堂村の開墾が始まる頃に建てられたものといわれている。

(2) 鎌倉道

「鎌倉道」は、八松稲荷神社から東の方へ「中道」を延長した道。八松稲荷から50[㍓]位先の右側に★東町道祖神(17)があり、この前を過ぎるとまもなくバス停「堂面」傍の信号のある交差点に出る、バス路を横断し、大きな松の木が両側にある上り坂の道を進む、住宅が並ぶ大平台を越えると、広い畑になる、

この中をしばらく行くと引地川に突き当る、現在の太平橋と作橋のほぼ中間地点である。

畑で仕事をしていた土地の古老の方に伺ったところ、昔の引地川は太平台の裾近くを流れ、そこに旧作橋があって、大雨があると川の流れが変わるため、この畑のどこかに橋があったが、今ではその跡も判らないとのこと。

引地川を渡ってからの「鎌倉道」は定かでないが、現在の八部運動公園の中を抜け、鵜沼、片瀬地区を経て、鎌倉へ通じていたようだ。

「四ツ角」の宝泉寺は、今から約800年前、源頼朝の勧請によって建てられたと伝えられている《地》。鎌倉時代の武士達が京都方面への往来にこの道を使ったので、「鎌倉道」と呼ばれたのではなかろうか。

また、約650年前の建武2年(1335年)の8月には、足利尊氏の軍勢が「辻堂・片瀬原の合戦」(足利尊氏下向・合戦注文記)で、北条時行の軍を破って鎌倉に攻め込んだ道とも言われている《ふ》。

江戸時代になると、「両詣り」と云って、大山詣での帰りに宝泉寺にもお参りを重ね、さらに江の島を訪れる人達が多くなり、この道を「江の島道」と呼んだ時期もあったようだ。「四ツ谷不動」(4)のところにある道標には「江の島左、大山右」とある。今でもこの道標は残っている。

(3) こいあ肥上げ道

「肥上げ道」は、八松稲荷神社の鳥居の前を海(南)の方へ3～4分行ったところの四つ角を左にまがると、すぐバス停「出口」の交差点に出る、バス通りを横断して辻堂小学校前を通り、日の出橋を渡って真っすぐ進むと片瀬・江の島に通ずる。昔、辻堂村の農家の人達が、片瀬・江の島の旅館などからでる人肥を求め、肥桶をかついで往復した道と云われている《地》。この道は殆ど平坦で太平台の砂山を越えることなく片瀬方面に行かれるので、肥桶車を

引いて往復するのに好都合だったのでこのような名前がついたのであろう。

また、「社宮神(田畑社)」の西側の道を海の方に行くと、まがりくねった細い道の部分もあるが、5～6分で、少し小高くなったところの左側に★南町道祖神(隣は、南町公民館・辻堂元町4-7)がある。この道祖神の少し手前に四つ角があり、これを東に行くと、前記のバス停「出口」の交差点に出るので、この道祖神の傍を通る道の方が昔の「肥上げ道」であったかもしれない。

日の出橋に近いところの北側、現在の辻堂東海岸二丁目あたりは、古い地名の★地蔵袋と呼ばれるところで、むかし引地川が大きく蛇行し、袋状になっていたところ《ふ》。この地域の緑化運動の先駆者を祀る★木又地蔵が、この付近にあったそうだが、その所在は確認できなかった。

(4) 四ツ谷道(別名光明真言道場道)と 四ツ谷ノ辻・四ツ谷不動

「四ツ谷(家)道」は、「三ツ又」の立て札によると、「三ツ又」から「四ツ谷不動」へ行く道となっている。(1)辻堂中道のところで記したように、細い道を「八幡社」までゆき、これを通り過ぎるとすっかり現代的の道となって、住宅街、商店街などのあいだを通って、最近できたJR東海道線のトンネルをくぐり、明治市民センターの手前で二ツ谷方面と四ツ谷方面に分かれ、右に行くと★四ツ谷不動のある昔の★四ツ谷ノ辻、現在の四ツ谷交差点の藤沢寄りの東海道(国道1号線)に出る。

この道は、むかし「四ツ谷ノ辻」から「四ツ角」の宝泉寺に行くために使われたので、「光明真言道場道」と呼ばれ、この道がさらに、「中道」を通して「鎌倉道」につながっているため「鎌倉道」とも呼ばれていたようだ。

むかし、ここに「四ツ家」と呼ばれた集落があり、4軒の家があったことから、この集落を「四家」と呼び、それが「四ツ谷」になったそうだ《地》。

合流点の藤沢寄りバイパス南側沿いには、綺麗な★八坂神社(18)がある。

現在、この合流点のところに、「四ツ谷不動」の祠と「江の島左・大山右」の石道標と石の大鳥居がある。祠の脇には、次の立て札がある。

四 谷 不 動 (大 山 道 標)

東海道と大山道が交差する四谷辻に建てられていた道標で、大山不動尊の下、正面に「大山道」、両側面に「これより大山みち」とあります。延宝四年(1676)に江戸横山町の講中が建てたものです。堂外の道標が初代のもので、万治四年(1661)に江戸浅草蔵前の講中によって建てられたものです。江戸時代を通じて、江戸町人の大山参詣が盛んでした。四谷辻には多くの茶屋が立ち並び参詣客を誘いました。今でも七月一日の大山開きには、四谷町内会の年中行事として、辻堂元町の宝珠寺の住職のもと護摩供養が行なわれています。

平成五年二月

藤沢市教育委員会

(5) ニツ谷道(別名光明真言道場道)と ニツ谷ノ辻

「ニツ谷道」は、「三ツ又」から前述の「四ツ谷道」を進み、明治市民センターの手前で左にまがって約5分位で、東海道(国道1号線)の横断歩道信号標示に「大山街道入口」とある交差点に出る。この道も、東海道から「四ツ角」の宝泉寺に行くための道なので「光明真言道場道」と呼ばれていた。

この交差点横断歩道の南側に「常光明真言道場道」の道標があるが、下半分は土中に埋まって「常光」の2文字しか読めない。道標には、寛保2年(1742年)の銘があるので、今から約250年前(江戸時代の中頃)に建てられたものと思う。

道路を隔てて「□巡禮西国坂東秩父供養」の石塔があったが、「大山道」の入り口を示すむかしの道標は確認できなかった。

この交差点あたりが、昔の「ニツ谷ノ辻」があったところであろう。この辻

から藤沢寄り現在のバス停「ニツ谷」の辺りに、昔の「ニツ谷(家)」集落があったらしい。バス停「ニツ谷」の少し藤沢寄りに、この集落の鎮守社★ニツ家稲荷神社(19)があつて、次の立て札がある。

ニ ツ 谷

江戸時代、大山詣で帰りの道者や信者たちが宝泉寺へ詣り、さらに江ノ島・鎌倉方面へ向う途中の休憩所(立場茶屋)として二軒茶屋があつたことからといわれています。又「ニツ家」が本来の地名であつたとも伝えられている。

藤 沢 市

むかし、東海道から宝泉寺に行くのに、このニツ谷ノ辻からと、引地、小和田の集落から行かれるようになっていて、その入口には「常光明真言道場」の石道標が立っていた《地》。現在、その1基が「ニツ谷」の入口に残っているが、あとの2基は宝泉寺の境内に移っている。

(6) 藤沢道

「藤沢道」は、社宮神(田畑社)の前を北に入ると約3分位で、左側のお墓の裏に★阿弥陀堂があり、お墓の横を通ってJ R東海道線を越え、上村橋を渡って藤沢宿へ通じている。阿弥陀堂の境内には、次の「立て札」がある。

藤 沢 道

別名^{かむらみち}上村道・^{やまみち}山道ともいい、藤沢への買物や、遊行寺の開山忌にでかける時に利用された。この阿弥陀堂の前を通り、小字ガル池、小字高山の境をぬけ(現在は一部工場敷地となっている)上村橋^{くるまだ}を渡り車田で東海道と合流する。

藤 沢 市

途中には、★^ね子の神社(別名子の権現)(20)がある。「阿弥陀堂」の横を進むとすぐ辻堂駅から太平橋に通ずるいい道に出て、右にまがると辻堂二葉幼稚園があり、幼稚園の僅か先を左にまがるとすぐ左側に大きな木に囲まれた

公園があり、その中に子の神社の祠がある。

(7) 羽鳥道

「羽鳥道」は、「四ツ角」から北に、辻堂新町と羽鳥地区を抜けて東海道に出る道《地》。

「四ツ角」から進むと、まもなく右側に北町公民館があり、その隣に★日枝神社(21)、境内には★北町道祖神もある。さらに、しばらく行きJR東海道線の少し手前左側に★宝珠寺(14)がある。

宝珠寺の山門前の小道を入ると「天王山」と呼ばれる小高くなった森の公園がある。ここには市内最大級と云われるクロマツがあり、辻堂の昔の面影を偲ばせる。丘の頂上には御嶽山座王大権現と刻まれた碑などがある。

宝珠寺の山門前まで戻って、さらに北の方に進んで東海道線の踏み切りを渡ると、5～6分でバス停「汲田^{ぐみだ}」のところに出る、ここから羽鳥地区に入る。

東海道（国道1号線）まであと10分位、途中、左側の汲田墓地の入口に「小笠原東陽」の大きな碑が目にとまる。昭和63年3月に藤沢市教育委員会が建てた「小笠原東陽・松岡利紀の墓」（次頁掲載）の立て札がある。

これの少し先に、羽鳥村の総鎮守★羽鳥御霊神社(22)があり、東海道に出て、少し右のところを横切って藤沢バイパスの方に行くと、バイパスの北側沿いの小高いところに★神明社(23)がある。

(8) 折戸道

「折戸道」は、現在の辻堂駅北側から大庭隧道に行く広いバス通りと殆ど同じ。明治市民センター前に、★本林寺(24)があり、大庭隧道入口手前左の所に★折戸日枝神社(25)がある。

- (9) 藤沢市教育委員会が建てた「小笠原東陽」の立て札。(羽鳥3丁目5-28、
汲田墓地の入り口)

小笠原東陽・松岡利紀の墓

東陽(1830~87)は美作國(岡山県)勝山藩士小笠原忠良の三男として生まれる。三歳の時父を失い、二六歳で昌平坂学問所に入り佐藤一斎、安積良斎あさかごんさいに学び、林鶯溪の門下生となるが、明治維新後脱武士として池上本門寺で僧たちに漢学を教えていた。明治五年、羽鳥村の三鶯八郎右衛門の招きで村内の廃寺徳昌院に読書院という郷学校を開き、村内幼童の教育指導にあたった。明治五年、学制発布によって読書院は羽鳥学校となった。東陽はこれとは別に読書院を存続させ独自の教育をおこない、明治十一年には学舎を建てて耕余塾と改称した。東陽は明治十年(1887)八月五八歳で没し、女婿松岡利紀がその後を継ぎ、明治三〇年に廃塾になるまでに村野常右衛門、平野友輔、武藤(金子)角之助や吉田茂など、政、財界を中心に多くの時の人材を輩出した。

昭和六三年三月

藤沢市教育委員会

社寺の概要

- (11) ^{やつまつ}八松稲荷神社（辻堂元町4-11） 「四ツ角」から東へ約150^{メートル}、「中道」の東はずれ。辻堂地区のこのあたりを古くは「八松(八的)ヶ原」と、呼ばれていたことが『源平盛衰記』また『平家物語』で知られている《わ》。皇国地誌に文治年間(1185～90年・平安末期)の勧請《わ》とある。
^{やつまつ}八松を「やまつ」《わ》とも呼んでいる。別名「東町のお稲荷さん」《地》。
- (12) 諏訪神社（辻堂元町3-15-13） 「四ツ角」の南側、「宝泉寺」の南隣。創建は、平治年間(1159～60年・平安後期)《わ》。
- (13) ^{ほうせんじ}宝泉寺（真言宗）（辻堂元町3-15-13） 「四ツ角」の南側、別名「南の寺」、むかしは「光明真言道場」と呼ばれた。創建は、建久2年(1191年・鎌倉初期)《わ》と云われている。境内の数多い石塔のなかに「常光明真言道場道」の石道標2基がある。
- (14) ^{ほうじゅじ}宝珠寺（真言宗）（辻堂元町2-4-27） 始めは、八松ヶ原久保田(「四ツ角」の少し北)にあった。別名「北の寺」。創立は、文治年間(1185～90年・平安末期)頃。一説には、天福元年(1233年)《地》。元禄7年(1694年)の火難で現地に移る。
- (15) ^{はくさん}白山神社（辻堂元町3-9-22） 三島明神を祭る三島神社を合祀。^{むなふだ}棟札に「安永三年(1774年)甲午天初秋七月大吉日本願主桜井太良右衛門、松平土佐守家中寿慶」の銘がある《わ》。地元では白山稲荷と呼んでいる。
- (16) ^{しゃぐうじん}社宮神（辻堂元町4-6-2） 「八松稲荷神社」の向い側。別名^{デンバタサマ}「田畑社」、又は「田畑稲荷」「でんぱくさま」。創立は、元禄年間(1688～1704年)《ふ》。
- (17) 東町道祖神（辻堂元町4-7） 「八松稲荷神社」から鎌倉道を東へ約50^{メートル}、路傍住宅石垣の上、竹藪と大きな木の足もと。男女二神の小さな石仏に

文化4年(1807年・江戸後期)の銘がある。《ハ》

- (18) 八坂神社(城南5-18-8) 四ツ谷交差点より藤沢方向に約200^{メートル}、バイパス沿いの南側。境内入口に、安永7年(1778年)の銘をもつ庚申塔・道祖神がある。
- (19) ニツ家稻荷神社(城南1-3-6) 東海道(国道1号線)のバス停「四ツ谷」と「ニツ谷」のほぼ中間。地元では「諏訪神社」又は「ニツ家稻荷」と呼び、ニツ谷集落の鎮守社、昔は、現辻堂神台2-8(バス停「ニツ谷」の南側)のところにあったが、昭和18年現地に移転。勧請年月は不明《わ》。
- (20) ^ね子ノ神社(辻堂元町5-2) 辻堂二葉幼稚園の向い側の路地を入るとすぐ。
^ね子の権現様と云われ、脚の病気に霊験あらたかの由、棟札に「文久元年(1861年)辛酉十二月二十九日社殿造営」《ふ》とある。
- (21) 日枝神社(辻堂元町3-5-21) 北町公民館の隣。創立は不明だが極めて古く、中宮は石造りの祠がある。別名「北の山王社」《地》。
- (22) ^{ごりょう}羽鳥御霊神社(羽鳥3-5-28) 羽鳥村の総鎮守社《地・ふ》。境内に至徳3年(1386年)銘の梵鐘があり。創立は不詳。地元では御霊(ごれい)神社とも呼んでいる。
- (23) ^{しんめいしゃ}神明社(城南3-2-13) 明治小学校西側。創立は永久5年(1117年)に鎌倉権五郎景政が大庭荘を伊勢神宮の御厨^{みくりや}に寄進し、天照皇大神を勧請したと伝えられている《わ》。
- (24) ^{ほんりゅうじ}本立寺(日蓮宗)(辻堂神台2-2-48) 創立は、文禄元年(1592年)。大正13年頃 静岡県清水市から現地に移転《わ》。
- (25) 折戸日枝神社(城南1-21-1) 大庭トンネル入口の手前左少し奥の山裾。以前は「山王権現」と呼び、明治初年に折戸日枝神社に改名。境内南側石垣には、元禄6年(1693年)・宝永6年(1709年)・宝暦6年(1756年)・天保

15年(1844年)の銘を刻む4基の庚申塔が並んでいる《わ》。

- (26) ^{かしわやまいなり}柏山稻荷神社(城南3-6-2) 藤沢バイパスの引地橋の北側。県下名勝史蹟45佳選の1つ、境内社巖島千人力弁天社、創立は保元3年(1158年)。大庭城主・大庭景親が城の護りのため引地川を堰止め、水門をつくり、その水門の護り神として勧請、巖島千人力弁天社は境内の池の中にあり、昔の水門があった所と云われている《わ》。

- (27) 養命寺(曹洞宗)(城南4-10-35) 東海道(1号線)引地橋の西、メルシャン工場の東隣り。創立は、元亀元年(1570年)《ハ》。一説には延文年間(1356~1361年)《わ》。御本尊の薬師如来は、建久8年(1197年)の銘があり、国指定重要文化財《わ》。

養命寺の前、東海道の向い側歩道脇に、双体道祖神の★「おしゃれ地蔵」(天明8年・1778年)がある。

養命寺から約300m西、バス停「三楽前」の所が、「宝泉寺」に行く「常光明真言道場道」の「引地」の入口。

《終》

「鵜沼」第73号
平成8年7月9日発行

I.近代住空間の形成
— 鵜沼を例とする
別荘型住空間 —

II.鵜沼南部の道

III.鵜沼の古道「江ノ島道」
を歩く

IV.辻堂地区の古道を歩く

ご注意：
本誌（機関誌）の文章引用
するときは、必ず出典を明
記してください

編集・発行 鵜沼を語る会
鵜沼公民館

電話 33-2001
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34